徳永直の会会報

第７１号

「生活の中に入れ」

会長　高　木　陽　助

有名なサン＝テクジュペリの『星の王子さま』の中に「本当にたいせつなものは目にみえないんだ……」という一節がある。目の前に見ているのに、私たちに見えるのは枝葉末節のどうでもいいことばかり。ただの外側の殻。本当に大切なことが見えずに些末な反応に終わってしまっている。本当に大切なことは「心でさがさなければ」捜せない。しかし、それがなかなか難しい。

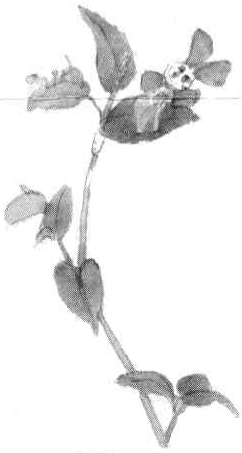
徳永直は一九五八年（昭和三十三年）、五十九歳で亡くなったが、最晩年に『一つの歴史』―徳永直遺稿集―の中で次のように述べている。（口述筆記）

じっさい、文学とその文学の対象となる生活ふんいきとは密接なものであり、農村を描こうと思えば農村の生活に自分の感情や感覚を浸しておかねばならず、工場労働者の生活を描こうと思えば工場地帯のふんいきにその生活をおかねばならない。

私は幼少から三十才まで工場で働いていた人間であるが（中略）私が小市民的生活に後退していったのには、第一には、私自身の怠慢がある。しかしながら同時にそれをそうさせる資本主義制度下のいろんな条件もあった。戦前や戦争中は第一に大工場地帯に住居をかまえれば警察の圧迫がはげしかった。

（中略）第二には、日本文壇そのものとすれば、そういう場所に住むことや対象をえらぶことも本来的には必要としなかった。作家が生活を通じて実践するものは、銀座とかキャバレーとか、そういうところでじゅうぶんであったし、むしろ労働者・農民の生活を対象としてえらぶことは、よろこばれなかったといっていい。当時の進歩的な読者と作家団体とが、これを支持したにすぎなかった。したがって私など、小市民的生活領域にいて、工場地帯や農村との間をおよびごし的に結びつけようと努力していたにすぎない。

「本当に大切なこと」は、「ぞうげの塔に引きこもって」いては、目に見えない。労働者や農民の生活の中に入って始めて「見える」のだ。徳永直没後六十年、私たちにとって本当に必要なことは何か。



ツユクサ
（林田宗雄氏提供）

目次

・「生活の中に入れ」　高木陽助：ｐ１
・「二一世紀ソビエト紀行」　金野文彦：ｐ２
・文学散歩⑭『麦の芽』　緒方宏章：ｐ３
・平成二十九年決算報告　：ｐ３
・平成三十年予算案　：ｐ４
・第四十一回「孟宗忌」案内　：ｐ４
・「徳永直没後六十年記念事業」案内他　：ｐ４

二一世紀「ソビエト紀行」

金野文彦

今、徳永直の青年期にかかわる一〇〇年の区切りが進行している。二〇一六年は大正デモクラシーを象徴する吉野作造の「民本主義百年」であった。一七年は、ロシア革命百年であった。徳永に関わるのは十月社会主義革命である。

その革命百年の年に、革命発端の地「ペトログラート」（現サンクトペテルブルグ）とモスクワに、初めて足を踏み入れた。私の所属する日本ユーラシア協会の企画ツアーで、レーニンの史跡を中心にロシア革命を記念しての行事であった。また、六月ということもあり、年金生活者などだけであった。

二つの都市では、それぞれ現地ガイドもいたが、日本からはロシア史研究者の斎藤治子氏にご一緒していただくという、大変贅沢なものであった。

われわれ一行は、成田空港から一〇時間ほどかけて、飛行機でモスクワを往復した。私にとっては久しぶりの長距離フライトで、大抵ロシアは、ウラジオストクかハバロフスクなのでかなりの負担であった。

だが、徳永直が岩上順一と一九五四から五五年にかけて、ソ連と中国を訪問した時は、飛行機・経路と中ソ両国との国交がないなどの条件を考えると、私たちのツアーの行程はとてつもなく楽である。

さて、まずはモスクワ経由でサンクトペテルブルクに入った。モスクワもそうだが、水の都である。江戸と大坂だって、水運が物量に大きな役割を果たしていた時代に、縦横に水路が通っていた。

ソビエトと臨時政府が二重権力状態を作ったダブリーダ宮殿、スイスからの封印列車で帰国したレーニンの降り立ったフィンランド駅、さらには、ボリシェビキ党からスモーリヌイこれだけでもロシア革命の史跡として十女学校など盛りだくさんだ。郊外へ足を延ばすとレーニンが臨時政府の追求を逃れ「国家と革命」を執筆したわら小屋（再現）なども見学できた。革命史跡は、解体はされず保存されているのが現状だ。帝政時代の教会や宮殿、エルミタージュ美術館などは大賑わいだ。

ツアー後半は、モスクワである。クレムリンなど、現在もロシアの中枢にも足を踏み入れた。赤の広場は、祝日・「ロシアの日」の後片付け中であった。徳永は入ることが出来たレーニン廟は閉鎖となっていた。私は、ミイラ化されたレーニンを見る気はない。

「廟」に付き従うように、旧ソ連共産党などの革命家の胸像が居並んでいた。

徳永直が、訪ソした五四から五五年は、スターリンが死んで間もない時期である。スターリンの遺体もレーニンと並んで、この廟に安置されていた。五六年のスターリン批判後に撤去され、荼毘に付されてクレムリンの壁に埋葬されたという。そんな経過があるためか、その胸像は他の人物たちよりは白っぽく新しく見えた。

徳永直は、訪ソでの工場労働者や市民の様子を『ソヴェト紀行』（角川新書、一九五七年刊行）にまとめているが、スターリン死後の緊張感がほぐれつつあるソ連の実情が反映されていると思える。青年期からあこがれの眼で見ていたソ連は、けっして理想郷ではないが、それ以上に戦争と抑圧を体験した直にとっては、やはり労働者農民の祖国として観たのではなかったか。

ちなみに、現在のロシアでは、評価される歴史的人物の一位はスターリンだそうである。市民の意識も、プーチン政権の大国復活路線と合致しているようである。

ロシア革命の実像を描くことは、歴史研究者が公開が進んだ史料をもとに、精力的に取り組んでいる。私たちも含め、日本でどのようにロシア革命が受容されていったかを、徳永直の作品検討で進めてみる必要があろう。

来る徳永直没後六〇年は、「シベリア出兵」と米騒動一〇〇年でもある。

（宮城　佐藤三千夫記念会）

文学散歩⑭

『麦の芽』

緒方宏章

―

善ニョムさんは、息子達夫婦が、肥料を馬の背につけて野良へ出て行ってしまう間、尻骨の痛い寝床の中で、眼を瞑って我慢していた。

「じゃとっさん、夕方になったら馬ハミ（糧）だけこさいどいてくんなさろ、無理しておきたらいかんけんが」

出がけに嫁が、上り框のところから、駄目をおして出ていった。

「ああよし、よし……」

善ニョムさんは、そう寝床のなかで返事しながらうれしかった。いい嫁だ。孝行な倅にうってつけの気だてのよい嫁だ。老人の俺に仕事をさせまいとする心掛がよくわかる―。

しかし、善ニョムさんは寝床の中で、もう三日くらした。年のせいか左脚のリュウマチが、この二月の寒気で痛んでしようがなかった。

「温泉にやりちゃあけんと、そりゃ出来ねえで、ウンと寝て癒してくんなさろ……」

息子は金がないのを詫びて、夫婦して、大事に善ニョムさんを寝かしたのだった……が、まだ六十七の善ニョムさんの身体は、寝ていることは起きて働いていることよりも、よけい苦痛だった。

寝ていると、眼は益々冴えてくるし、手や足の関節が、ボキ・ボキと音がして、日向におっぽり放しの肥料桶みたいに、ガタガタにゆるんで、タガがはずれてしまうように感じられた。―起きて縄でもないてえ、草履でもつくりてえ、―そう思っても、孝行な息子達夫婦は無理矢理に、善ニョムさんを寝床に追い込み、自分たちの蒲団までもってきって、着かせて、子供でもあやすように云った。

「ナアとっさん、麦がとれたら山の湯につれてってやるけん、おとなしゅう我慢していてくんなさろ……」

しかし善ニョムさんは、リュウマチの痛みが少し薄らいだそれよりもよっぽど尻骨の痛みがつよくなると、我慢にも寝ていられなくなった。善ニョムさんは今朝まだ息子達が寝ているうちから思案していた。―明日息子達が、川端田圃の方へ出かけるから、俺ァひとつ榛の木畑の方へ、こっそり行ってやろう―。

（「徳永文学選集」より）

麦の芽（熊本市）

第四十一回 孟宗忌案内

期日　平成三十年二月十二日（月）午後二時から

場所　立田山登山口「徳永直文学碑」前

式次第
①会長挨拶
②献酒
③献花
④メッセージ
⑤経過報告
⑥総会

平成三十年 総会

期日　平成三十年二月十二日（月）午後三時半から

場所　ガーデン・パーティー（中央区草葉町二―三二　二階「無印良品」前）

２０１７年会計報告（１月～１２月）

収入①		支出②	
繰越金	１８４，６３３	事務費	７８０
会費(35人)	７０，０００	通信費	１１，７４６
利子	１５	総会関連費	０
寄付	２８，７４４	熊本文化振興会団体会費	２０，０００
		ＨＰ関連費	０
		会報印刷費(69号、70号)	６２，６４０
		孟宗忌関係費	５，１５４
		定額預金	１００，０００
収入合計	２８３，３９２	支出合計	２００，３２０
		残金	８３，０７２

２０１８年予算案（１月～１２月）

収入①		支出②	
繰越金	８３，０７２	事務費	１０，０００
会費(35人)	７０，０００	通信費	１５，０００
雑収入	１，９２８	総会関連費	１０，０００
		熊本文化振興会団体会費	２０，０００
		ＨＰ関連費	０
		会報印刷費	４０，０００
		孟宗忌関係費	１０，０００
		予備費	５０，０００
収入合計	１５５，０００	支出合計	１５５，０００
		残金	０

徳永直没後六十年記念事業

寄付金（人数）
十六万四千円（一九人）
ご協力ありがとうございました。

会費納入について

平成三十年度の会費の納入を、同封の振替用紙でお願いします。

なお、「徳永直没後六十年記念事業」にご賛同される方も、同封の振替用紙でお願いします。通信欄に「会費」、「記念事業会員費」の口数をお書きください。

印刷所　㈱昭和印刷　三四四―五二五二・三四三―三八八六